二つの草創期
――ハイジとマリオをつなぐ線

アニメーター　小田部羊一（こたべ よういち）

Essay　時の調べ

私は、1960年代という日本のアニメーションの草創期から制作に関わってきました。同時代の宮崎駿さん、高畑勲さん、大塚康生さんといった方々と切磋琢磨する中、『アルプスの少女ハイジ』（1974年）でキャラクターデザインと作画監督を務めるなど、仲間にも作品にも恵まれたと思います。

東京藝術大学で日本画を専攻していましたので、今思うと、アニメーションの世界に入るというのは大胆な進路選択だったと思います。学生時代には、人物であろうと動物であろうと植物であろうと、人の気持ちも含めて世界の全てを1本の線で表現することをずっと学んでいました。東映動画に入社して最初の研修で、鉛筆1本の線でキャラクターを描き、それを動かすということを行いました。その時、ただの線に見えても、そこには柔らかさや美しさが込められていることに感じ入りました。子どもの頃に大好きだった漫画映画の楽しさというのは、この「線」による表現にあったのか、と面白くてたまりませんでした。そして、日本画とアニメーションが追い求めているものは地続きであると実感するとともに、二つの表現様式の間に何も違いを感じませんでした。以来、私は「線」に魅了され、「線」により動きをつけ表現をしていく、ということに、ずっとまい進してきたのだと思います。

1985年からは任天堂の開発アドバイザーとして『スーパーマリオブラザーズ』のキャラクターデザインや、『ポケットモンスター』シリーズのアニメーション映像の監修などを行いました。組織を離れフリーランスの立場で活動をしている頃、以前の同僚から、「これからのゲームには、アニメーションのノウハウが必要になります。若手に技術を伝えていきませんか」と誘われたのがきっかけでした。商業アニメーションの経済的な制約の中、自分が表現したいものが描けないなどの停滞感を感じていた時期でもあったため、私で役に立つならば関わってみようと思いました。

ゲームの知識はほぼ皆無でしたが、『スーパーマリオブラザーズ』で初めてマリオの動きを見て、アニメーションが忘れ去りつつあるもの、まだ表現されていないけれど、これからゲームがやろうとしていることを理解しました。初期の登場人物はドット絵ですので、パッケージイラストのみを頼りに、マリオやピーチ姫はどんな性格か、どういう表情で表現するか、開発者の皆さんと相談しながらキャラクター像を少しずつ明らかにしていきました。当初は1～2年のつもりだったので、その後21年間も京都で仕事をするとは思ってもみませんでした。

妻でありアニメーターとして仕事のパートナーでもあった奥山玲子は、こうした私の挑戦を喜んでいました。彼女は女性アニメーターの草分け的な存在で、NHKの連続テレビ小説『なつぞら』（2019年）の主人公のヒントともなりました。私はこのドラマの時代考証を担当しましたが、奥山が東映動画で働いていた1960～70年代は、女性アニメーターが少なく、結婚すると寿退社を迫られるような時代でした。奥山は家庭も仕事も両方やり遂げる、という気迫に満ちた人で、制作現場でも関係者がともにアイデアを出し合い、徹底的にキャラクターや作品を練り上げる体制をつくったほか、キャラクターの内面の葛藤や感情表現などを深めることに取り組んでいました。

後年は銅版画の制作に打ち込み、アニメーション技術と銅版画を融合した作品制作に2人で挑戦したことがあります。『冬の日』（2003年）という作品で、松尾芭蕉の連句をもとに、35人のアニメーターが一句ずつ作品をつくる企画でした。連句とは、最初の句から次の詠み手がイメージを連想して引き継ぐ、またはまったく破壊して次の句をつくり36句で一連の世界を成す、という高度な文芸手法です。この作品の制作にあたっては、連句の基礎を学ぶなど、江戸期の文化の土壌の奥深さにも触れることができました。このように、アニメーションには、絵画や文芸など様々なジャンルを土台として、さらにその素材を発展させていく力があると思います。

（インタビューに基づき編集部で再構成）

略歴

1936年台湾台北市生まれ。1959年、東京藝術大学美術学部日本画科卒業後、東映動画（現・東映アニメーション）入社。『わんぱく王子の大蛇退治』『太陽の王子　ホルスの大冒険』『長靴をはいた猫』『どうぶつ宝島』『空飛ぶゆうれい船』の制作に携わる。東映動画退社後、高畑勲、宮崎駿とともにメインスタッフとして『パンダコパンダ』『アルプスの少女ハイジ』『母をたずねて三千里』、『龍の子太郎』『じゃりン子チエ　劇場版』でキャラクターデザイン・作画監督。1985年、開発アドバイザーとして任天堂に入社。2007年任天堂退社後フリー。2015年度第19回文化庁メディア芸術祭で功労賞を受賞。

撮影および取材協力
アニドウ・フィルム代表
なみきたかし